



紅葉を求めて～北漢山ドゥレキル

凜とした風が頬に心地よい韓国の秋、山は紅葉を見ようと多くの人で賑わっています。韓国では10月下旬に紅葉のピークを迎えます。今回は特にソウル市民に人気のあるスポット、北漢山（プッカサン）にあるドゥレキルをご紹介します。‘ドゥレキル’とは韓国語で山や都市の周囲を歩きやすく整備した遊歩道のことです。ですが、韓国の山は岩場の部分が多いため、遊歩道というより登山道と言った方がいいところもあります。

北漢山はソウル市の北側に位置し、白雲台（ペグンデ）、萬景台（マンギョンデ）、仁寿峰（インスポン）の3つの峰からなる海拔800メートル級の低い山です。その裾野や稜線に作られた全長71.5kmの遊歩道は距離、所要時間、難易度別に21種類のコースに分かれており、都心からも近く、気軽に山登りやトレッキングを楽しめることで有名です。また、北漢山は1983年に国立公園に指定されており、清らかな溪流や植物などの自然だけでなく、遺跡にも触れることができます。ソウルのような都会の中に作られた国立公園は、世界的に見ても珍しいのではないのでしょうか。

さて、北漢山の登山口に近い地下鉄の駅を降り、リュックを背負った人たちの後ろをついて行けば、登山グッズを売る店や、簡単な腹ごしらえができる売店が立ち並ぶにぎやかな通りが目飛び込んできます。朝目覚めて突然ふらりとやって来ても、ここで登山の準備はすべて揃いそうです。韓国の秋は気温差が激しいので、日中は薄着で過ごし、朝晩は厚めの羽織るものを用意し、また、靴もでき

れば滑りにくい登山靴やトレッキングシューズがいいでしょう。

そこから住宅地を横目に15分程歩くと、今回のスタート地点である‘北漢山ドゥレキル7区間’の案内板が見えてきます。7区間は‘古城の道’と呼ばれる全長2.7km、所要時間1時間40分の中級コースです。このコースは途中、朝鮮時代に現在のソウルが位置していた漢陽（ハニャン）を囲む4つの山をつなぐ城郭‘漢陽都城（ハニヤントソン）’が築かれ、その北側の守りとなった北漢山城（プッカサンソン）と城郭をつないで築城された蕩春台城（タンチュンテソン）の暗門（秘密通路）の一部が残されています。

出発からしばらくは滑らないようにタイヤのチューブを細く切って敷かれた長い上り階段が続きます。途中登ってきた道を振り返れば、眼下には来るときに見えたマンションやソウルの街並みが小さく見えます。毎年黄砂に悩まされるソウルも、少し登れば空気も澄んでいます。

途中休憩をはさみながら、ようやく展望台に到着しました。遠くには峰と峰をつなぐ稜線と北漢山の絶景が広がります。ところどころ花崗岩の岩肌にワイヤーが張られ、しっかり掴まらなければ危ない場所もあり、大変変化に富んだコースでした。

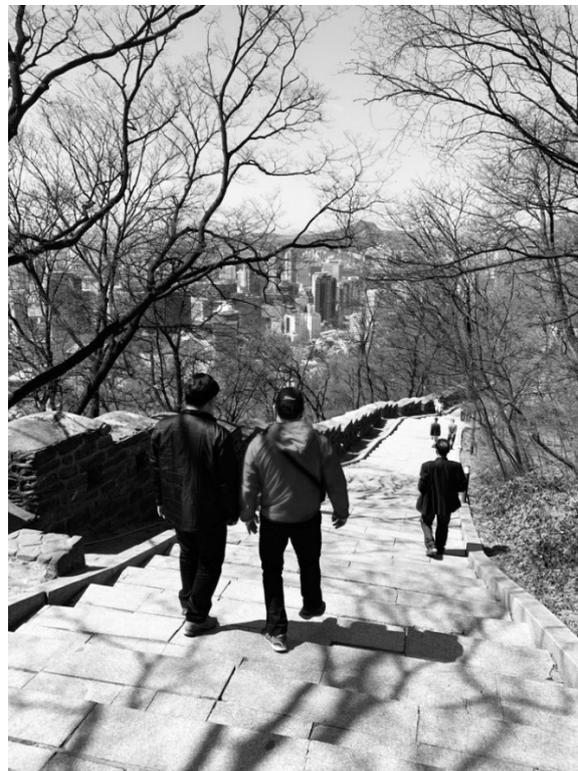
色づく山々の景色を堪能してゆっくり下山したら、お待ちかねのランチタイムです。韓国で登山と言えば、伝統酒マッコリが外せません。どの山に行っても、その麓にはマッコリによく合う料理を出す飲食店が軒を連ねます。今回は手作り豆腐専門店に行きました。



はんぺんを思わせるふわふわでほのかに甘い豆腐と豚肉の甘辛炒めは絶品です。その他、日本でもおなじみの海鮮チヂミや冷麺など。登山を終えたらマッコリと美味しい料理に舌鼓を打つ。これが韓国流の山の楽しみ方でしょう。

もう少し軽めに、アップダウンの少ないコースがいいと言う方は、ソウルの旧市街地の城郭‘漢陽都城’に沿って散策するコース（全長18.6km、6つのコースがある）をおすすめします。朝鮮時代、城郭は外と内を行き来することができるように東西南北に4つの大門（通称、東大門や南大門など）が配置され、大門の間には4つの小門が配置されました。それらは復元と修復を経て、現在はウォーキングの名所としてソウル市民だけでなく、海外からの観光客にも親しまれています。

冬が長く、秋が短い韓国。人々は厳しい冬を前に、つかの間の秋空を楽しんでいます。



筆者紹介



柳鍾宇 (ユ ジョンウ)

GIP Korea代表弁理士。ソウル大学電気工学部を卒業。2009年弁理士登録。弁理士になる前は（株）LGディスプレイで設備購買及び技術営業の日本担当を務める。

前職の特許事務所では、最初は（株）サムスンの特許明細書作成／中間処理／外国出願などを行い、後に日本企業の韓国出願を担当。趣味はゴルフ。